

狒ブーは出入り自由の「こころのネットワーク」だーぼくと狒ブーの関係ー
H5.3.31/狒江市立中央公民館
狒ブー「いなほ」平成4年度青年教室活動記録

狒ブーは出入り自由の「こころのネットワーク」だ

ーぼくと狒ブーの関係ー

狒ブー年間講師（昭和音楽大学短期大学部助教授）

西村 美東士

1. ブーローの自由な精神を求めて

ブーローとは、フーテンの寅さんのような人のことをいいます。寅さんは、自然を愛し、あたたかい隣人に恵まれ、本当の友だちをたくさんもっていて、心豊かに生きています。私たちは、そんな寅さんにあこがれます。

私たちが社会に生きていくためには、今の仕事や学業をやめてしまうわけにはいきません。でも、自由な遊び心は失いたくないのです。

狒ブーでは、ブーロー精神にのっとり、豊かな時間と空間を創り出そうと話合っています。かけがえない自分の人生をていねいに大切に生きるために、あなたも狒ブーの一員になりませんか。

以上は、ぼくが一九九二年度狒江市青年教室の企画委

員の青年たちに提案したチラシの前書きである。企画委員の青年たちは、それをほぼ認めてくれたし、そのうえ「コマブーっていう響きが、かわいいんじゃない」と、ぼくの考えたネーミングにも賞賛を与えてくれた。あとで知ったことだが、このチラシを見て応募してくれた青年の中には、とにかくこの前書きの文章にひかれたから参加したという人がいるのだ。ただし、一人だけだ。

2. アイデアはバラバラだけれど、そのひとつひとつが宝物

なんといっても、あのチラシの一番の魅力は、企画委員の青年たちが作った訳のわからないプログラムだろう。毎月、いろんなことを、スキゾ的にやってみようというのだ。昔、各地で行なわれていた青年学級も、目的なテーマをひとつだけ設定するということをしないで、高校に行かない青年たちのための総合的な学習カリキュラムを提供していたが、狗ブーのプログラムは、それともちよつと違う。狗ブーでは、企画委員の青年が、あくまでも自分の関心・興味からバラバラなアイデアを出したのである。

でも、それはバラバラながらも、ちゃんとほかの青年たちに通用するものであった。通用しそうなものも出るには出たが、岩崎さんやぼくが「えっ、それはどうかな」と言うまでもなく、発案者自身が「あれっ、これはだめだな」と言って引っ込めたり、ほかの青年から「いだから、うまくいかないんじゃない？」と言われて、発案者も「やっぱり、そーう？ 私もそういうふうにも思ったのよね」とか言って引っ込めてしまうことが多かった。

むしろ、つね日頃は自らの常識的な枠組を打ち破りたいと思っているのになかなか打ち破れないぼくなどにとっては「えっ、なに、それ」と思われるようなものの中に、話をよく聞いてみると、「いやあ、やっぱり面白そうだな」と心変わりしてしまうものが多かった。そういうアイデアは、とくに光っていた。「紙芝居」のアイデアが出たときは、ぼくは最初は、「そんなもの、今の青年がやりたがるものか」と内心では思っていた。しかし、あつという間に、「自転車に『狗ブー紙芝居軍団』というのぼりを立てて、市民祭で練り歩こう」という所まで話は発展していて、そのときにはぼくも、すでに積極的な支持派に回っていた（ぼくのほかには紙芝居反対派は

いなかった)。あとになって、この「紙芝居」は、青年たちにとっての、そしてぼくにとっての素晴らしい自己変容のきっかけのひとつになったのである。

そのことから、ぼくは、「グループによる発想法」などが企業などで研究されているけれども、そんなテクニクなんかあまり使わなくても、一人ひとりの心が解放されていて、メンバー間に受容的な雰囲気さえあれば、青年たちがいくらでもアイデアを披露してくれるのだ」と思うようになった。それぞれのアイデアは素晴らしい宝石である。しかも、その一つひとつが色も種類も異なる宝石だ。

3. プータローの自由のつらさ

話を戻そう。じつは、例の前書きを書いたとき、ぼくはつぎのようなことを考えていた。

現代青年が、いま、もっとも求めているものは、自分たち一人ひとりがそれぞれの個性を発揮できる場と、そういう場を創り出すあたにかい仲間関係なのではないだろうか。それを難しい言葉で「支持的風土の集団」

ということもできるし、オモシロ言葉で「サンマ」(心を開いて交流できる時間・空間・仲間の3つの「マ」)ということもできる。ネットワークの本当の意味はこれであろう。

だが、そういうネットワークの場合は、本人にとって最初はかえってつらいものになることがある。自分の責任でその自由を行使しなければいけないからである。今まで、保護されたり、管理されたりしたことはあっても、自由になったときの恐ろしさは感じたことがないのだ。自由のつらさはプータローの宿命である。だが、このようにして苦しみながらも自由を行使したことがないと、結局は、「保護のしかたが足りない」「管理のしかたが悪い」などと言って、いつも社会や他人のせいにして被害者を演じて生きていく人生の構えが身についてしまう。狛プーは、一人ひとりの個性をできるかぎり尊重することによって、青年が自由の楽しさとともにその怖さを体験して、自分の非主体的な思い込みから自らを解放していける場である。

4. 撤退自由のネットワークにおける「深い撤退」

「いったん集団に入ってしまったら、そこから『抜ける』ことは無責任である」、ばくにはこういう言葉が「不幸の手紙」のような「不幸の分かち合い」「不幸の押し付け」として感じられる。他者に対して自分や自分の帰属する集団に「同一化」するように迫る、ピア・コンセプト（仲間意識）の逆機能（否定的側面）そのものではないか。

狗ブーは出入り自由のネットワークのように運営されている。だから、「いつでも、だれでも、よかったらおいでよ」と新規参入（ニュー・カマー）を歓迎するだけでなく、来なくなってしまう人には、「たまには顔を見せてよ」と呼びかけることはあっても、撤退したそのことについては責任を問うことはしない。

突然の撤退によって抜けた穴でも、残った人で何とかなるものだ（岩崎さんは大変だろうけれども、それは社会教育職員の根源的なつらさである）。まあ、役割分担があるのに抜けたくなった場合は、連絡ぐらいすることはネットワークのルールだと思う。そういうルールが学習できるのも、自由なネットワークだからそのものだ。

撤退の自由がなければ、本人がそこに参加しているのは「お義理」であり、自発的参加ではないこともありうるから、ネットワークには撤退の自由が必要だといえる。しかし、その場合、撤退する本人が運営に関して撤退後も発言したり（OBの現役支配の弊害がそれである）、残っている人への個人攻撃をしたりするなどの、「立つ鳥あとを濁す」ような未練がましい行為があると、ばくは本当にイヤだなあと思う。自分の「未練」を他人に押し付けるのは、ブイタローの自由な精神に反するものだ。ネットワークに撤退の自由が求められるとともに、撤退する個人には「深さ」が要求されるのである。

5. 出入り自由の淋しきを受容する

しかし、狗ブーのメンバーはその辺のところは大丈夫のようだ。撤退するときは、内心は本当は淋しいのかもれないが、ニコニコして去っていく。みんな適度のおとな心も持ち合わせているからだろう。キャンプだけ参加してあとはまったく出てこない人もいたが、その人などは最初から「みんなでキャンプに行くのが好きだから、キャンプだけ参加します」と言って、キャンプ場では常

連メンバーのように振舞って楽しんでいた。

問題は、残された仲間たちの淋しさである。中間まとめの図にある「出入り自由の淋しさ」とはこのことである。しかし、一人ひとりがこの淋しさとうまくつき合えないと、いつまでたってもピア・コンセプトの逆機能は乗り越えられないし、ネットワーク型のコミュニケーションを創り出す主体性を身につけることができない。現代青年は、へたにコミュニケーションすることによって、相手を傷ついたり自分が傷ついたりすることを極端に恐れている。これは良い意味での「現代青年の優しさ」でもある。しかし、その優しさは、「だからコミュニケーションしない」という彼らの敗北主義の象徴のような「山アラシジレンマ」へ接近したいが、かといって、お互いの針で傷つけ合いたくはないというジレンマに陥る危険にも結びついているのだ。

粕ブーで「出入り自由の淋しさ」(交流の結果)を感じながらもその淋しさを受容することは、「結果を恐れるがあまり、したい交流もしない」から、「したい交流はするが、自分の期待どおりに交流してくれない相手の存在も受け入れる」ネットワーカーに自己変容することにつながっていく。これこそが「山アラシジレンマ」を

真正面から突破するための唯一の道筋なのだと思う。

6. 粕江市にのつての「流入青年」たち

粕ブーの「いつでも、だれでも、よかつたらおいでよ」の精神(ネットワーク・マインド)は、当然、粕江市外から、なかには一時間以上もかけて通ってくる青年たちの参加を増やす結果につながっている。これは「地域に根ざす社会教育であれ」というスローガンを平面的にしかとらえようとしない人には、好ましくない現象として映るかもしれない。

しかし、ちょっと待ってほしい。粕ブーは、今や、現代青年にとつての「アジュール」のひとつとしての役割を果たしている。アジュールとはもともと「(自治的な都市などの)不可侵の領域」という意味だが、いわば「駆け込み寺」であるとして理解しておけばよいと思う。

「正統派」からはじきとばされた人たち(ブーロー)は、そんな自分が受容されるサンマを感覚的にかきつけてアジュールに集まってくる。そこでは、仲間の活動に加わらずに(参加できずに)その活動をボーッと眺めていることだつて許される。そういう所からユース・カルチ

ヤー（若者文化）が生まれ、社会の「正統派」の文化に影響を与えていく。

だから、狛ブーがアジールであるとすれば、狛江はユース・カルチャーの発信基地のひとつと呼べるわけだ。そこでの活動は、狛江市に若々しい息吹を吹き込んでくれるだろう。現に、狛ブーの紙芝居は、市民祭で市内の多くの子どもたちに、その親たちに歓迎された。こんなことを言うとは狛ブーのメンバーに怒られそうだが、たった一カ月の練習でプロ並みの腕ができあがるわけがない。紙芝居の面白さにはまってしまった、その「一時的流入青年たち」の気持ちだが、狛江市民の気持ちと触れ合って、市民祭の場で共感的な世界を創り上げたのである。

「地域に根ざす」と言っても、それを機械的に推し進めようとする、「土壌」はいつまでたっても豊かにならず、草木は「根腐れ」してしまう。「アジールへの流入青年」たちが吹き込む新しい風が狛江の土の上を吹いてこそ、その土（地域文化）も豊かになるのである。

さらには、流入青年たちの中には大学生も多い。これに対して、一昔前の青年教育は、大学に行かない（行けない）勤労青年のための福祉的、恩恵的な意味合いをもっていたと思う。しかし、山アラシジレンマの青年たち

にとっては、本人が大学生だろうが勤労青年だろうが、社会教育の世界を知ってネットワーク・マインドを身につけることが緊急課題になっていることには変わりがないのではないか。

むしろ、高等教育（大学の授業）は本来、自己教育力（「学びたい」という意欲など）を前提に成立しているのだが、その前提そのものが成立していない現状のもとでは、狛ブーのような「社会教育」によって、その大学生に対する高等教育が成立する条件がつけられているという大それた考えさえ、ぼくは抱いているのだ。なぜなら、今日の大学生の学習意欲の喪失は、その大もとには生きる主体性そのものの喪失に根源を発していると考えられるからだ。狛ブーは「何を樂しみに自分は生きるのか」ということを取り戻す場である。

7. キャンプは夜だ

キャンプは新「生活集団」である

寝床分科会？ うーん、ちょっと違うなあ

自然体のナイトハイクが青年に与えた「偶発的学習」青年にとっての「自然体の夜」のもつ魔力と魅力

8. 青年が自分のお金を払う時

「つば八」での自己解放と相互解放

気まぐれなプロジェクト活動の主体性（花火大会、スキー・ツアー）

与えられた役割への義務感より、自由な選択行為としてのメンバーシップを

9. 空白のプログラム

玉乗り、百人一首などを、翌週のプログラムに突然組

み込む

フリースペースの意味

プログラムでは今日やる予定は何もなかった、だから楽しみにしてきたと言う女性

岩崎さんの人気……公民館に配属された社会教育主事
の存在意義

10. なんとと言っても「紙芝居」

森下さんの自然体のすごさに感動

高齢者と青年との異世代間交流？ うーん、ちょっと
違うなあ

ブータロー精神にあふれた自己表現活動とは何か
個性、仲間関係、そして、やっちゃえ精神

11 狛ブーは薩しのネットワークである

いくらなんでも、たくさんのことを書きすぎてしまっ
た。それに、第一、この原稿の締切もあと数時間後に迫
っている。そこで、7から10については項目だけ挙げ、
あとは今後の狛ブーの中で考えていくことにして、そろ
そろ、この原稿でぼくが一番言いたかったことをまとめ
ておくことにしたい。

ぼくが大学のある授業で、人間の「偶像崇拜的」な行
為について、依存の表れであると批判したところある
学生に「先生は傷ついたことがないんですか」と書かれ
てしまった。「その人がそれを信じていて幸せになれる
のならいいではないか。だから、批判すべきではない」
というのである。そうだとしたら、そのあとに残るコミ
ュニケーションとは何と空疎なものなのだろうか。また、
あるボスを偶像崇拜するファシズムが表れても、ぼくた

ちは「一部の人が幸せになれるのなら」と言つて批判を避けなければならぬのだろうか。社会とはそんなに個人がばらばらに生きていけるものではないだろう。しかも、その「優しさ」のわりには、多くの触れられたくない過去の傷の有無まで問うてくる身勝手さをも兼ね備えている。

人間は、親に全面的に依存できる時期を過ぎて、現実原則を働かさなければいけない「社会」に出ていく。それを「楽園追放」という。そのときに、すでに、「痛み」は不可避免的に生じるのである。「痛み」を経験していない人はいない。気づかないようにしている人は、たくさんいる。しかし、そういう「痛み」をつらくて乗り越えられないでいる人が、「痛み」をもっていることを証明された人間のようにほかの人を見下し、結局は、なんだかえって威張っているような状況に、ぼくは異議を申し立てたい。「個の深み」とは、「痛み」の大ききなのではなく、その人が自分自身の「痛み」や自分の枠組と異なる他者とどれだけ深く対面できているかなのではないか。

この事例にばくは現代青年のもっている変な思考回路を感じる。快適なコミュニケーションのためには「心

を開く」ことが不可欠であるが、だからといって、「開きたくないこと」まで無理に開くことはないし、また、逆に、「心を開かせることが必要だから」といって、相手の人格にまで立ち入って論じたり、過去を詮索したりすることなどは誰にもできないはずだ。その相互認識なしには、心を開くコミュニケーションなどできるわけがないし、山アラシ・ジレンマに陥ってしまうことも目に見えている。もしかしたら、何人かの現代青年は「心を開くコミュニケーション」を非主体（偶像崇拜）的に懂れすぎているために、その結果として、「心を開くコミュニケーション」が実際にはできなくなってしまうのかもしれない。

傷ついた青年たちのもっている敗北主義は、現在、「被害者」を演じようとする思考回路にはまっぴらで、それがそれなりの自分勝手な安定感を生み出し、このようににっちもさっちもいかないう状況になってしまっていると思われる。そういう現代社会において、狛プーの青年たちが培ってきたネットワーク・マインドの「朗らかさと深さ」は、とても重要な役割を果たすことができよう。狛プーの役割は、「自分への信頼（自信）や他人への信頼」を失いつつある現代青年にとっての、その基本

的信頼感を回復するための、心を開いて交流できる「愈し」(いやし)のネットワークとして機能しているといえるのである。

西村美東士(にしむらみとし)プロフィール

一九五三年生、男。

一九七七年 東京都教育委員会社会教育主事補

(府中青年の家、武蔵野青年の家、社会教育主事室、

計画課)

一九八六年 国立社会教育研修所専門職員

一九九〇年 昭和音楽大学短期大学部助教授

そのほか、東洋大学非常勤講師、総務庁青少年対策本部青少年問題ドキュメンテーション研究会委員、文部省全国の生涯学習情報のシステム化に関する調査研究協力者、佐野市生涯学習推進協議会委員、練馬区生涯学習推進懇談会委員、豊島区池袋新青年館基本計画策定委員、亀岡市生涯学習センター建築構想策定受託者、全日本社会教育連合会月刊誌「社会教育」編集委員、神奈川県生涯学習ボランティア活動推進委員会委員など。

学生や社会教育職員は、mitoさん、mitoちゃんと呼ぶ。生涯学習、社会教育、青少年教育、学習情報

提供、パソコン通信、パソコン活用などを研究中。著書に「生涯学習か・く・ろ・ん」「こ・こ・ろ生涯学習」(ともに学文社)。

狛江ブリーク教室の年間講師のほか、社会教育現場にも頻繁に出没している。

